

http://business.nikkeibp.co.jp/article/life/20080528/159493/?P=1
日経ビジネス抜粋

今から40年近く前の1970年に、同時通訳者として名高い國弘正雄氏が『英語の話しかた』という本を著し、非常に骨太の内容にもかかわらず、75万部を越える大ベストセラーとなった。この本の中でいちばん注目を集めたのは、「只管（しかん）朗読」という國弘氏の造語だった。

「只管打座」ならぬ「只管朗読」とは？

これは、道元の「只管打座」にヒントを得た言葉で、「ひたすら朗読（音読）する」という意味だ。彼がこの学習法を知ったのは、中学1年の時に習った英語の先生からだったという。「英語を習う一番よい方法は、中学1年のリーダー、さらに2年3年のリーダーを声を出して、繰り返し、繰り返し読むことである」と教えられたのである。

「当時の私は非常に純真な生徒でしたから木村先生のいわれることを実に愚直なまでに実行したのです。時あたかも戦争中で、今とちがってテレビもなければラジオ講座もない諸事不便な時代でしたが、幸い教科書だけはありました。そこで、これを声を出して繰り返し読んだものでした。おそらく1つのレッスンについて500回ないしは1000回も読んだだろうと思います」と國弘氏は語る。

この超人的な教科書の音読が、のちに彼の英語を余人の及ばぬ域にまで高める素地となったのである。

この「只管朗読」に対する反響はきわめて大きかった。『英語の話しかた』から29年経たのちに出された続編の『[國弘流 英語の話しかた](#)』では、この只管朗読に対する考察がさらに深まり、英語学習書の白眉と言うにふさわしい書物になっている。

『國弘流 英語の話しかた』の中で「只管朗読」の基本的なやり方を詳述している箇所を要約してみよう。音読が次第に深化（進化）していく様がよくわかる。

1. 只管朗読の必要に目覚め、テキストを決める。
2. テープ（今ならCD）を聞き、テキストの意味を理解する。
3. 単語レベルの発音をクリアする。
4. つっかえずに読めるようになる。
5. 次第に構文的な切れ目がわかってくる。
6. 日本語に頼らずに意味が文の先頭から自然にとれる。
7. イメージが生き生きと実感できる
8. 朗読していて、自然さと楽しさが感じられる。
9. テキストの例文の応用可能性にどんどん気づく。
10. 自分の英語力が広がっていく可能性を実感する。

これは、やり方を述べているというより、國弘氏自身が体験したことをそのまま書いていると言ったほうがいだろう。苦行として音読を続けていたのではなく、いかに音読を楽しんでいたかが伝わってくる。徹底した学習は、言い知れぬ喜びをもたらすものだ。

彼は、暗記を目的として音読せよとは決して言わない。それと同様、今かかげた10項目も、目標として示しているのではなく、「100回、200回と音読を続けていくと、最後には必ずこのような境地に達するよ」といざなっているのである。昔の日本人が素読を通して漢文の素養を深め、やがて自分でも自由に文が書けるようになっていったプロセスとよく似ている。

英語学習の道しるべがここにあった

前回の稿の中で、先人から授かった知恵のひとつとして紹介した次の一文、「英文を理解（和訳）するのが最終目標ではない。理解の後、音読を繰り返して知識を内在化させなければならない」というのは、國弘氏から学んだレッスンだったのである。

ひとことで言うなら、復習（音読）こそ真に力がつく学習なのであり、理解や分析は音読への助走に過ぎないということだ。言い方を変えれば、学習は予習なのであり、復習が学習のコア部分なのだ。これは、学習に関する「コベルニクスの転回」と言えるかもしれない。

さて、國弘氏は1999年に『國弘流 英語の話しかた』を公にした翌年、音読用のテキストを自ら編んで世に問うている。それがベストセラーとなった『[英会話・ぜったい・音読](#)』である。同書の序文の中に、「音読」を理論的に掘り下げた文章があるので、以下に要点をまとめておきたい。これは、英語学習について考えるすべての人の確かな道しるべとなるだろう。

(1) 大脳の中には言語中枢があり、ふたつに分かれている。「ヴェルニック中枢」は、言語を受け身的に理解することを担当している。「ブローカ中枢」は、言語を能動的に使うことを担当している。

(2) 目から入った情報はヴェルニック中枢に送られて理解される。それを口に出して音声化しようとする、情報はブローカ中枢に伝えられる。発せられた音声を自分の耳で聞き、再びヴェルニック中枢でその成否を理解する。

(3) 言語能力を蓄積していくには、この2つの中枢の連携を活性化させる必要がある。

(4) 2つの中枢間でinteraction（相互関連）を頻繁に引き起こしていけば、知識が肉体化され、受け身の知識だけでなく、能動的

に使える知識となって身につく。これを知識の「内在化 (internalize)」という。

(5) 母語を習得する場合は、この機能が無意識に働く。しかし、外国語を学ぶ時は、意識的にこの循環が行なわれる環境を作る必要がある。

こうして、「ヴェルニッケ中枢」と「ブローカ中枢」を共に刺激する「音読」が、かけがえのない学習法であることが明らかになるのである。

ところで、音読は、米国では必ずしも最良の学習法とは考えられていないようである。ひとりで行なう音読は、誤った発音を強化する危険性があるし、人間同士のコミュニケーションに比べると閉鎖的で、発展性のない学習法だからというのがその理由のようである（そもそも米国には生の英語が満ち満ちている）。しかし、最近ではCDなどにより正しい発音を確認できるし、音読にはひとりで計画的に学習を進められる利点もある。

「理解」で止まることが、上達を妨げている原因だ

さらに、國弘氏によれば、愚直に音読を繰り返すことにより、「日本語に頼らずに意味が文の先頭から自然にとれる」ようになり、やがて「例文の応用 可能性にどんどん気づく」ようになるというのである。一見受動的に見える学習が、ある時を境に能動性（自由に使える状態）へと転化していく。昔から、名人の域に達した人は、このような泥臭い努力を地道にやり通した人物であることは、記憶しておいて損はないだろう。

この音読という方法を最高・最強の英語学習法と断言する人は今も数多い。たとえば、カリスマ英語教師と呼ばれ、相次いでベストセラーを刊行している安河内哲也氏は、近著『[できる人の英語勉強法](#)』の中で、次のように音読を称えている。

「(予備校での) 音読・直読という英語学習法との出会いは、それまで訳読中心の学習法しか知らなかった私には、青天の霹靂でした。音読・直読の学習法をスタートしたことで、私自身の英語力に大きな変化がおきました。『リーディング』と『ライティング』の力が飛躍的に伸びたのです」

もうひとり、駿台予備学校の人気講師、大島保彦氏も自分の若い頃を振り返って、次のように書いておられる。

「ふと、あるとき、思いついた。学校の教科書の試験範囲の部分を音読してみることを。ただ闇雲に音読した。発音がいいかげんな単語は調べなおした。慣れてきたら教科書を伏せて口に出していった。新聞広告の裏が白紙のものをためておいて、そこに書き写してみた。最低100回はやってみた。それ以来、中間・期末試験で95点未満を取った記憶がない。その後、大学入学後もいろいろな語学に挑戦したが、いつも同じようにやってみた。うまくいった」(『[駿台式！本当の勉強力](#)』講談社現代新書より)

先ほど、「昔から、名人の域に達した人は、このような泥臭い努力を地道にやり通した人物である」と書いたが、この伝統は今もなおしっかりと生き続けているのである。

理解するところで学習を止めている方は、そこをスタートラインにして、「体に落とし込む」ステップを付け加えてほしい。日本の伝統芸をぜひ英語学習にも活かしてほしいと思う。効果のほどは数多くの先人たちが保証している。